

乙植木古墳群 II

福岡県粕屋郡須恵町大字植木所在遺跡の調査

須恵町文化財調査報告書

第 2 集

序

この報告書は、昭和60年8月19日から同年9月27日まで、丸福運輸合資会社の委託を受け、須恵町教育委員会が福岡県教育委員会の指導、援助を受け、須恵町大字植木字山城戸にあった古墳4基の発掘調査を行った、埋蔵文化財の記録です。

調査した4基の古墳は、昭和52年に九州縦貫自動車道の建設時に、県教育委員会より報告された乙植木古墳群に属します。

大古よりの営みを続けてきたこの緑の台地が、やむを得ぬ開発により消え去るのは惜しいものの我々の先祖が残した生活の知恵を記録し、また世に報告することで、この貴重な文化遺産をとどめたいと思います。

なお、報告書の発行までの間、埋蔵文化財に対して、深い御理解をいただきました丸福運輸合資会社の各位、旧土地所有者の稲永勇氏、酷暑の中現場作業の技術的指導をなされた調査技師及び作業に携わった方々に深く感謝の意を表します。

昭和61年3月31日

須恵町教育委員会

教育長 寫 末 友一郎

例 言

1. 本書は合資会社丸福運輸の運輸施設建設によって破壊される古墳の調査報告であり、要した経費はすべて同社の負担による。
2. 調査は福岡県教育委員会の協力を得て、須恵町教育委員会が昭和60年8月19日から9月27日にかけて行った。
3. 本古墳群の一部は、昭和47（1972）年、九州縦貫自動車道建設に伴って調査・報告がなされている。したがって本書を『乙植木古墳群Ⅱ』とし、古墳は続き番号とした。
4. 出土遺物の整理は、鉄器を九州歴史資料館技術主査 横田義章氏が、土器は九州歴史資料館で県文化課 岩瀬正信氏の指導で行った。
5. 遺構、遺物の実測は浜田・高山・島田正浩・原富子・平田春美の諸氏と飛野が行い、整図は豊福弥生・関久江・鶴田佳子の諸氏と飛野が行った。
6. 遺構写真は飛野が、出土遺物の写真は九州歴史資料館技術主査 石丸洋、藤美代子氏が行った。
7. 本書の執筆はⅠを高山慶太郎氏、Ⅳ－Ⅴを宇美町立資料館 平ノ内幸治氏に依頼し、他を飛野が行い、編集は飛野が担当した。
8. なお、本書に使用した空中写真は矢野清治・高山両氏の手による。
9. 本書に使用した方位は特記しないものは磁北を示す。

本文目次

1. はじめに	1
2. 位置と環境	3
3. 既往の調査	4
4. 調査の成果	5
I) 第5号墳	5
II) 第6号墳	9
III) 第7号墳	15
IV) 第8号墳	19
V) 旧石器時代の遺物	20
5. おわりに	23

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図(1/50,000)	2
第2図 周辺地形図	4
第3図 表採遺物(1/3)	5
第4図 墳丘測量図(1/400)	6
第5図 第5号墳主体部実測図(1/40)	7
第6図 第5号墳遺物出土状況(1/20)	8
第7図 第5号墳出土土器Ⅰ(1/3)	8
第8図 第5号墳出土土器Ⅱ(1/6)	9
第9図 第6号墳土層図(1/00)	10
第10図 第6号墳主体部実測図	11
第11図 第6号墳出土土器Ⅰ(1/3)	12
第12図 第6号墳出土土器Ⅱ(1/3)	13
第13図 第6号墳出土土器Ⅲ(1/6)	14
第14図 第7号墳主体部実測図(1/40)	16
第15図 第7号墳出土土器(1/3)	17
第16図 鉄器・石製品実測図(1/2)	18

第17図	第6号墳出土大刀(1/5)	19
第18図	第8号墳主体部実測図(1/40)	20
第19図	乙植木古墳群出土石器実測図(1/1)	21
第20図	参考資料(2/3)	22

図 版 目 次

図版 1.	(1)全景(西から) (2)全景(北西から)
図版 2.	(1)第5号墳現況(東から) (2)第5号墳遺物出土状態(南から) (3)第5号墳主体部(東から)
図版 3.	(1)第6号墳現況(東から) (2)第6号墳主体部と墳丘出土土器(西から) (3)第6号墳主体部(西から) (4)第6号墳主体部と墳丘出土土器(南から)
図版 4.	(1)第6号墳主体部遺物出土状態(北から) (2)同(北東から) (3)第6号墳玄門部分(東から) (4)第6号墳墓道左側貼石(南から)
図版 5.	(1)第6号墳墳丘出土土器A群(南から) (2)同B群(南から) (3)同C群(南から)
図版 6.	(1)第7号墳現況(東から) (2)第7号墳主体部(北から) (3)同(西から)
図版 7.	(1)第8号墳主体部(西から) (2)調査終了後全景(東から)
図版 8.	出土遺物Ⅰ
図版 9.	出土遺物Ⅱ
図版 10.	出土遺物Ⅲ

1. はじめに

当該発掘調査の端緒は、丸福運輸合資会社の運輸施設（車庫及び事務所）建設計画による開発である。

計画の当初において、会社は須恵町教育委員会に文化財の有無について問い合わせ、町教育委員会は、最終計画における用地区域内に、3基の古墳が遺跡等分布調査により確認されていたことで、文化財保護法第57条の2に定める「周知の埋蔵文化財包蔵地」であることを指摘し、必要な処置について、会社の発掘調査に関する事務手続を代理で行う粕屋農業協同組合開発課を通して検討することとして協議がなされた。

以降発掘が開始された8月19日までの間、町教育委員会は、文化財保護の見地と県からの指導に則り、古墳の現状保存等を考慮した設計変更を要望したが、経費面と地形的問題で折り合いがつかず、止むなく事前の発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、調査に要する経費は会社に負担願ひ、発掘資材は福岡県文化課より借用し、8月19日から9月27日の間に須恵町教育委員会が実施した。また新たに一基の古墳が見つかり、調査した古墳は既知の3基を含めて4基である。

調査関係者は次のとおりである。

総括・庶務

須恵町教育委員会	教育長	高末友三郎
同	社会教育課長	川添 光
須恵町立歴史民俗資料館		高山慶太郎
同資料館運営協議会委員		山元 國吉

発掘調査

福岡県教育庁文化課	技術主査	浜田 信也
同	技 師	飛野 博文

また、調査を円滑に進めるにあたって、丸福運輸合資会社代表取締役 高口芳美氏、粕屋農業協同組合開発課 井上泰孝氏、旧地権者 稲永勇氏らの御配慮を得たとともに、須恵高校教諭 藤野重雄氏、県文化財指導員 平ノ内幸治氏や島田正浩氏、須恵高校郷土史クラブ・福岡大学生らの諸君の応援、福岡市埋蔵文化財センター 柳沢一男氏、宗像市教育委員会 原俊一氏、県立甘木資料館 石山勲氏らの指導・助言をうけた。記して感謝します。

発掘作業員 安河内勘三郎・稲永金治・印藤嘉巳・西山喜六・稲永シズ子・稲永和代・堀ハツ子・三角トキ子・三角タミ子・三角アヤノ・矢野清治・秋竹スエノ・橋本カオル



- 1. 乙植木古墳群 2. 駕与丁池畔A遺跡 3. 戸原遺跡 4. 上大隅カケ塚遺跡 5. 隈遺跡
- 6. 井山A・B遺跡 7. 古大間遺跡 8. 辻畑遺跡 9. 七夕池古墳 10. 光正寺古墳
- 11. 堂場古墳群 12. 神領古墳群 13. 駕与丁廃寺

第1図 遺跡分布図

2. 位置と環境

本遺跡は粕屋郡須恵町大字植木の標高約35mの独立丘陵の東端近くに立地する。

粕屋郡は古賀町を最北として南北に長く延び、久山町・篠栗町・須恵町・宇美町・志免町の5町は内陸に位置する。これらの東側には福岡平野と筑豊地方とを隔てる三郡山地が屏風状に南北に連なり、そのうち若杉山から北西へ派生する丘陵が篠栗町と須恵町を、砥石山から派生する低丘陵が須恵町と宇美町とを分つ。また、須恵・宇美・志免の3町は四王寺山から北西へ延びる月隈丘陵で西側を塞がれて盆地状の地形となり、中を須恵川・宇美川の小河川が貫流する。

この地域の可耕地は決して広くはないが、神功皇后伝説のある宇美八幡宮や径29mの大門墳七夕池古墳¹、古式の墳丘を有する光正寺前方後円墳など、豊かな歴史を秘めている。

旧石器時代の遺物は粕屋町駕与丁池畔A遺跡や戸原遺跡、上大隈カケ塚遺跡などが知られるが、遺物量は多くない。縄文時代の散布地も駕与丁池周辺にみられるが、詳細は不明である。

弥生時代になると調査例が増加する。篠栗町隈遺跡では袋状堅穴6基と土壙墓²、粕屋町井山A・B遺跡では袋状堅穴・住居跡・甕棺など、同古大間遺跡³で8基の住居跡、同辻畑遺跡⁴で甕棺墓・土壙墓などを発掘している。

古墳時代の遺跡には重要な資料が多い。先述した七夕池古墳は堅穴式石室から鏡・琴柱形石製品などを出土した。同じく志免町堂葉古墳群は、径約20mの円墳で組合式木棺から仿製鏡の外鉄製農具を有する第1号墳、全長26mの帆立貝式古墳で割石小口積の堅穴式石室から農具類を出土した第2号墳などからなる。宇美町神領古墳群第1号墳は塊石積堅穴式石室と組合式木棺の2つの埋葬主体を有し、長宜子孫内行花文鏡などを出土している。こうした4世紀後半から5世紀前半に至る中・小古墳の実態が粕屋・宗像両郡などで明らかになりつつある。

古代では粕屋町駕与丁庵寺⁷で礎石とともに8世紀の上器・瓦が調査されている。

註

1. 福岡県教育委員会・志免町教育委員会『七夕池遺跡群—調査報告会資料—』1974。
2. 篠栗町教育委員会「隈遺跡」(『篠栗町文化財調査報告書』第1集 1981)
3. 粕屋町教育委員会『古大間池遺跡』1977
4. 福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXX 1979
5. 志免町教育委員会「堂葉古墳群」(『志免町文化財調査報告書』第2集 1984)
6. 宇美町教育委員会「神領古墳群」(『宇美町文化財調査報告書』1984)
7. 福岡県教育委員会「駕与丁遺跡」(『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』I 1970)

3. 既住の調査

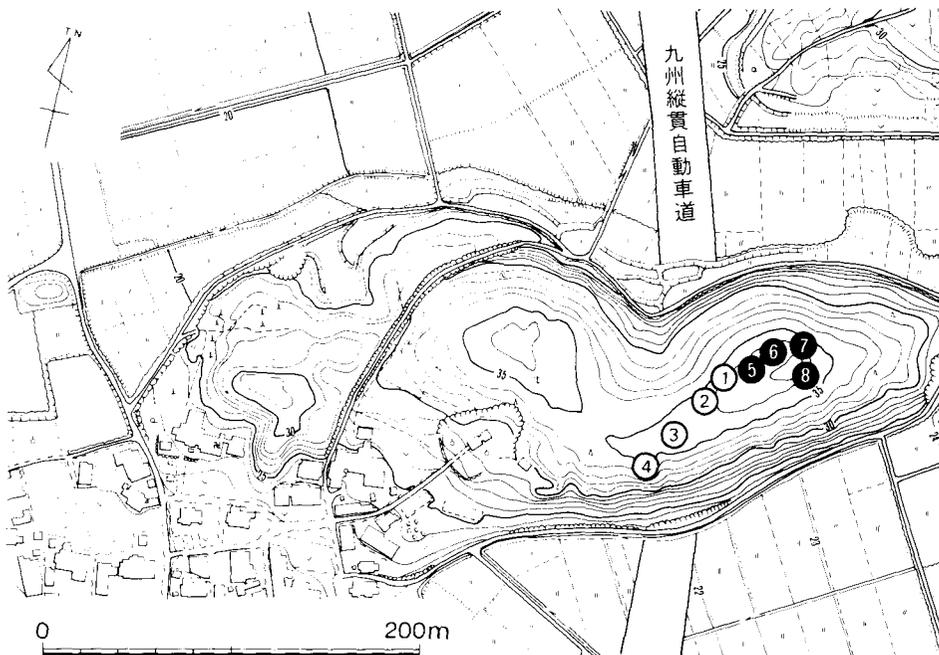
本古墳群は昭和47（1972）年、九州縦貫自動車道の建設に伴って県教育委員会の手による発掘調査をうけている。その結果は、『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告X』として昭和52（1977）年に報告されており、以下にその内容を略述する。

第1号墳 径約15mの円墳で、盛上は約1m。主体部はいわゆる竪穴系横口式石室で、石室プランは幅0.8～1.05m、長さ約2.4mの長方形に近い。横口部は玄室床面より25cm高く、袖石は框石上に立てられる。墓道は長さ1m余の短いもので、玄門部前面両側に簡略な貼石を設ける。

遺物は石室内から鉄鏃片、須恵器壺（完形）を出土し、陶器TK208型式に比定されている。

第2号墳 径約20mの円墳。主体部は単室の横穴式石室で、平面プランは幅1.45～1.95m、長さ2.75mと第1号墳に比して幅広く、一回り大型である。袖石は地山に接している。

遺物は石室内から須恵器直口壺・同蓋を出土するとともに墳丘から69個体以上の須恵器・土師器および鉄器（鎌・石鑿鑿・小型鑿・鉈・手斧等）が一括出土している。須恵器は蓋杯・甕・高杯・直口壺・脚付有蓋壺・大甕など多器種にわたり、土師器は大部分が碗である。時期はほぼTK23型式に相当とされている。



第2図 周辺地形図 (1/4000)

第3号墳 径約18mの円墳。主体部は単室の横穴式石室に属するが、敷石が遺存するのみである。それから推定される石室平面プランは幅1.5m、長さ2.5mほどの羽子板形のものである。墓道は前記2古墳と同様に短く、簡略なものである。

遺物は敷石上から小型仿製鏡2面、銅釦、刀子、鋤子、斧、鉄鏃、釘、ガラス玉などが出土し、他に須恵器甕等が検出されている。

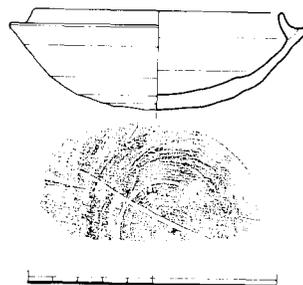
第4号墳 径約14mほどの円墳。主体部は全長8mの複室構造の横穴式石室である。

以上のうち、第1～第3号墳は尾根稜線よりやや北にずれて築造され、いずれも西側に開口するのに対して、第4号墳は南側に占地し、墓道も南へと延びて造営時の意識の違いが読み取れる。これらの古墳は第1号墳から第3号墳が5世紀後半から6世紀初頭にかけて継続して、そして、第4号墳は空白期間をおいて6世紀後半代に築造されたとされる。

4. 調査の成果

調査対象面積は約1800㎡で3基の古墳が判明していた。調査に入った当初、伐採した雑木が散乱した状態であったので、重機を用いて整理したあと、古墳下層に他の遺構の有無を確認するために古墳南側に尾根線と平行するトレンチをあけたところ、第7号墳南で思いがけず石室の残骸を発見したことで、調査した古墳は4基となった。

一方、調査以前にこの丘陵上で、旧石器時代の遺物を採集したという情報があり、また古墳の盛土を除去する際にも黒耀石・サヌカイト片を多く検出したことなどからその遺物の検出を試みたものの、調査の手続き上の理由で古墳下層を調査できなかったことは悔やまれる。

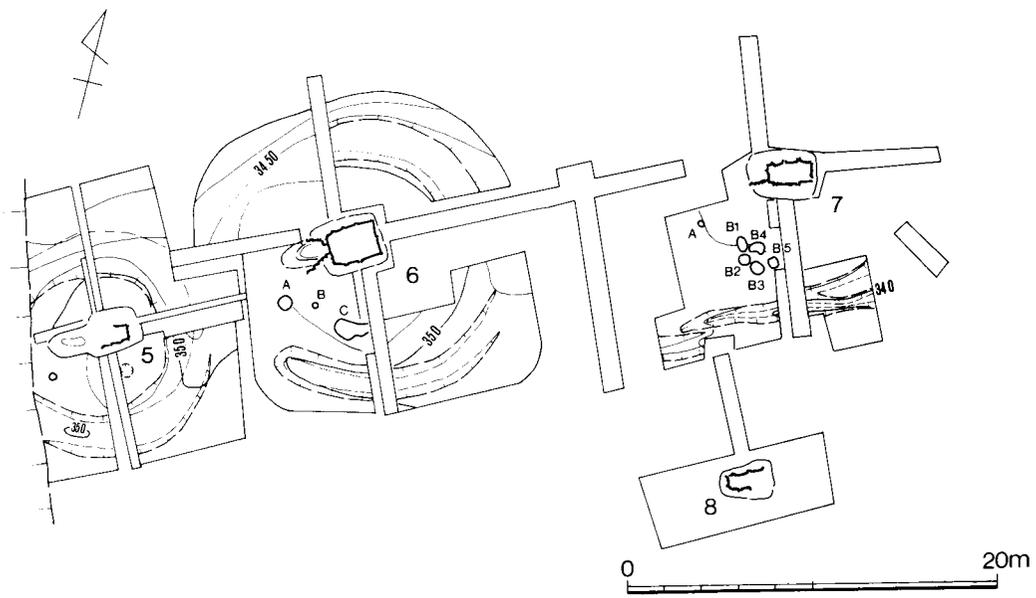
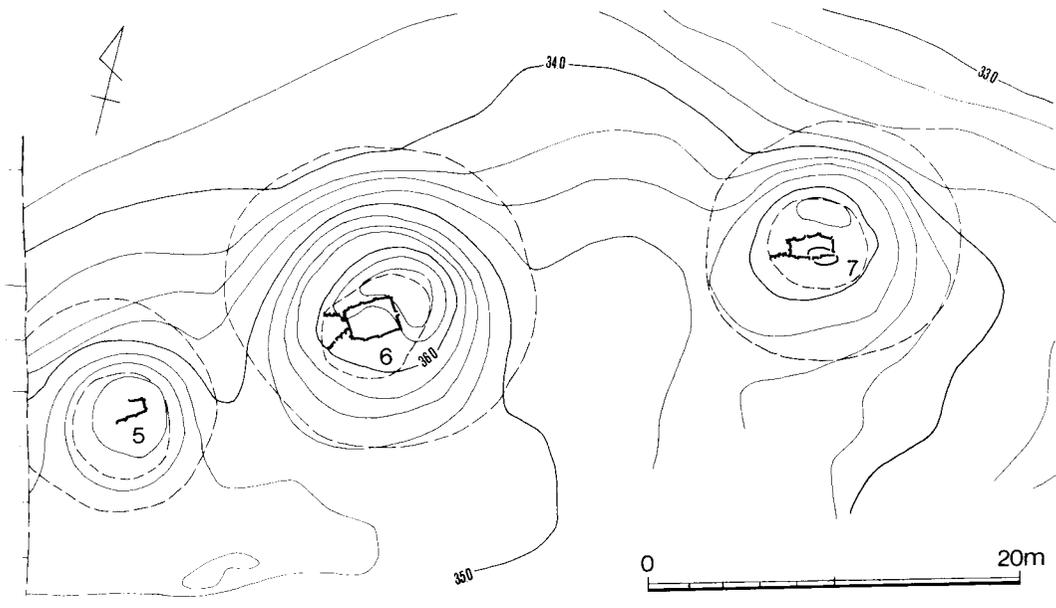


第3図 表採遺物 (1/3)

1) 第5号墳

墳丘 (第4図、図版2)

現状は径11m前後の円形となり、頂部は径6m弱の平坦面であった。土層の観察を以下に記す。北畔では盛土は石室中心点から3.65mの地点から始まり、その層序はほぼ水平に保たれている。旧地表である灰黒土層は同じく2.55mの地点で消え、以北は大きく削り出される。盛土の厚みは最大0.75mにすぎない。南畔では盛土は同3.6mの地点からいわゆるカルデラ状に施し、旧表土は同2.95m地点で消える。さらに同4m地点から幅2.3m、深さ0.2mの周溝が半周する。東畔では盛土は2.7mの地点から始まり、以東は削り出し、3.5mの地点からは幅1.5m、深さ0.2mほどの溝を掘削している。したがって南北約7mにわたって盛土を施すわけであるが、周溝が墓



第4図 墳丘測量図（上：現況、下：調査終了後、1/400）

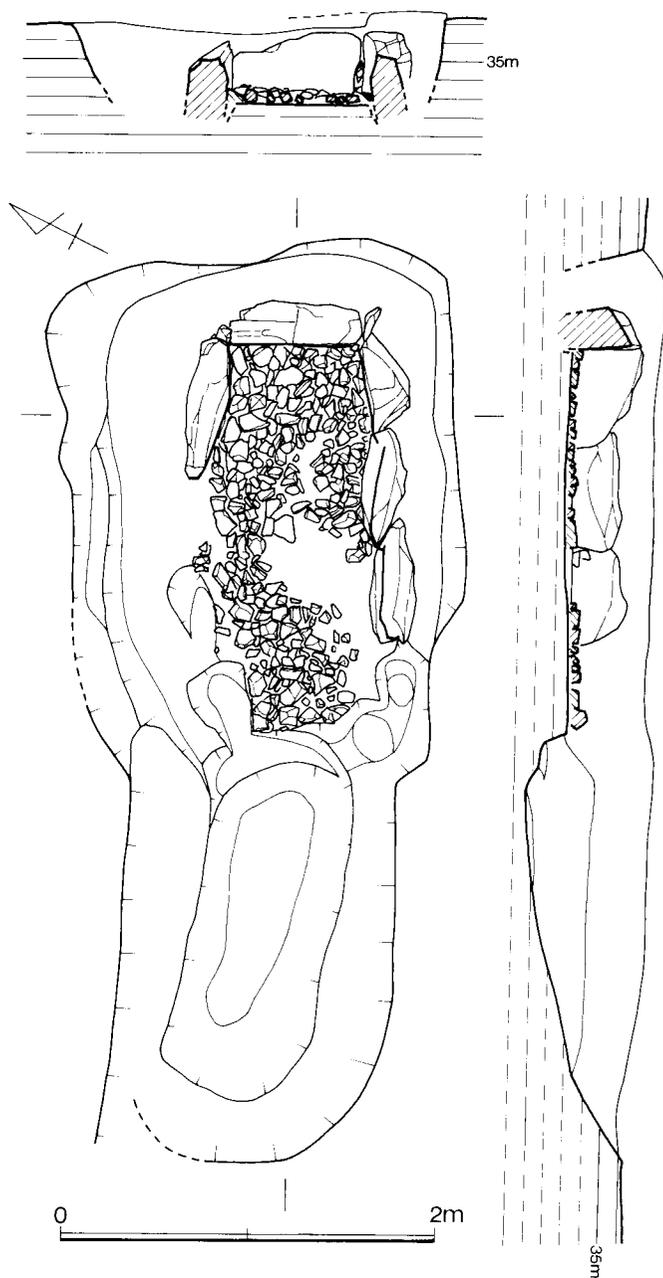
域を画するという意識の下に掘削された構造であるとすれば、南北約10m、東西は西端を墓道の始点と仮定して約7mとなる。より厳密に墓域を限るならば地山を削り出したすべての範囲という一考もあるが、現実としてそれを見極めることは不可能に近い。よって、ここでは後述する6号墳の墓道の構築法も考慮して径10mの円墳とする。

主体部（第5図、図版2）

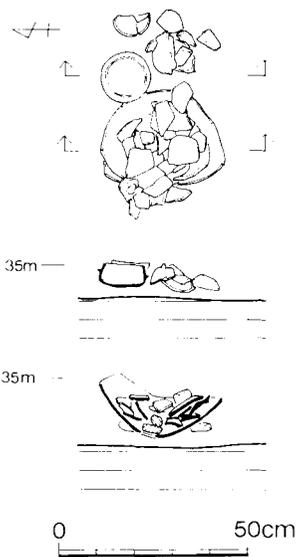
主体部は破壊され、石材は抜かれていたが、5枚の腰石と敷石の敷設範囲から幅0.7m、長さ2.1mの狭長な長方形プランとわかる。また、長さ2m強の墓道が西側に取りつくことから、竪穴系横口式石室と推測される。

遺物（第7・8図、図版8）

遺物は石室埋上中および墳丘から出土した。石室埋上中出土の遺物で図示したものは鉄鎌のみであるが、他に太刀と思われる残片も存在する。また墳丘からは土器が出土した。特に注意すべきは墓道右側から出土した一括遺物である（第6図、図版2）。表土除去中にすでに一部を採り出したために細部は不明であるが、観察の結果を以下に示す。本土器群は比較的大型の甕と杯身・杯蓋2個体ずつと小礫からなる。大型甕は底部を穿



第5図 第5号墳主体部実測図（1/40）

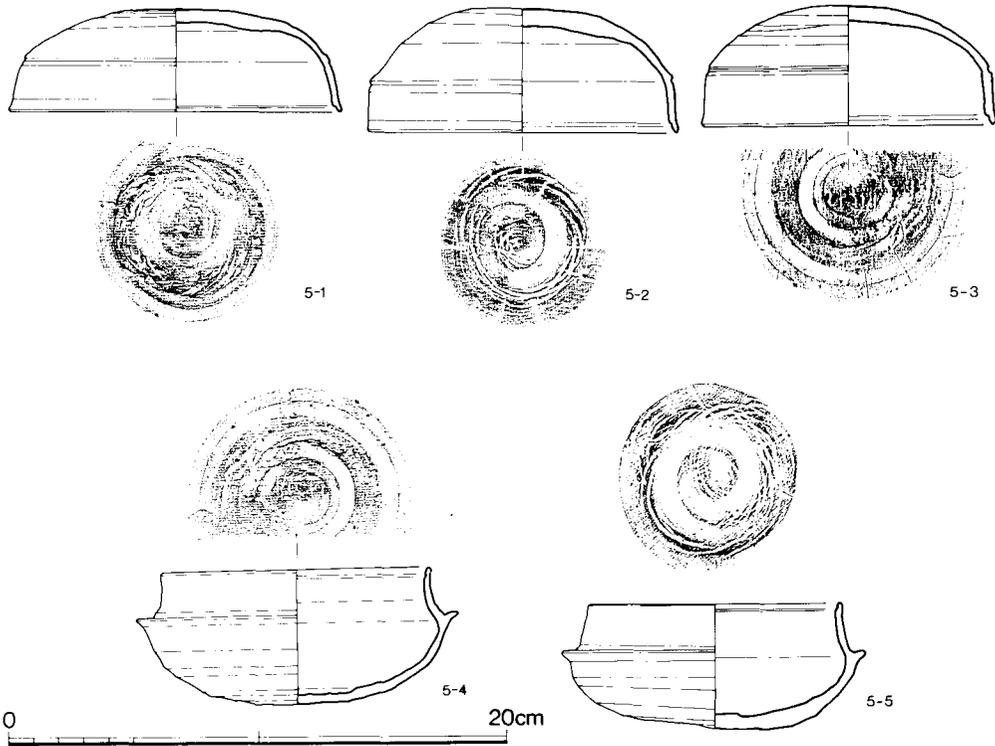


第6図 第5号墳土器出土状況
(1/20)

孔し、小礫を支えに正立していた。上半部は割れて落ち込むが、その状況は自然に生じたものである。横に置かれた蓋杯のうち、身の一個は正置しており、いま一つは横転。蓋の一つは隣接して逆転し、 $\frac{1}{2}$ を欠損しており、いま一つは、表土除去時に採り上げたために、どのような状況にあったのか不明である。いずれもほぼ地山にあるが、さらに盛土が施されていたかは把握できていない。

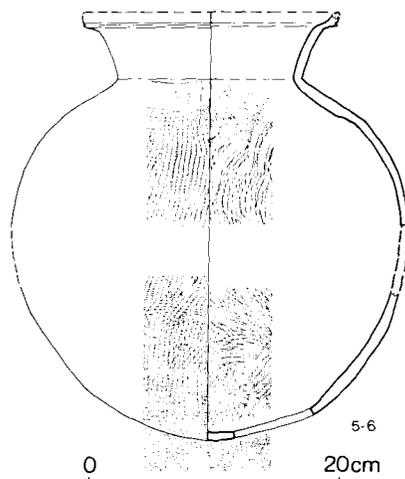
鉄器 第16図1の鉄製曲刃鎌は中央部を欠損するものの、全容はうかがえる。背の厚みは最大6mmで、柄装着部の折り返しは身に対して直角に近い。

土器 第7図5-1は第6号墳との間から出土した。約 $\frac{3}{4}$ が残る。細部の整形は他に比してやや甘い、調整は丁寧に行い天井部内面には同心円の当具痕が残っている。胎土は精選されるが、焼成温度はやや低いようである。5-2は不用意に取り上げた祭祀土器の一つで完形に近い。調整は丁寧に細部の造作も比較



第7図 第5号墳出土土器 I (1/3)

的シャープであるが、これも天井部内面に当具痕を残す。焼成はやや甘く、部分的に灰黄白色を呈する。5-3・4も祭祀土器群で、この2つは焼成などからみてセットとなるであろう。3は約 $\frac{1}{2}$ の残欠で、整形・調整技法は2と同様でやはり天井部内面に当具痕を残す。焼成は甘く灰白色に近い。この3者はともに、天井部口縁部の境および口端部内面に沈線を施している。4も約 $\frac{1}{2}$ の残欠。造作は丁寧で、口縁部内面は段を設けず沈線に代える。底部内面に当具痕を残す。焼成は甘く、灰黄色に近い。5-5は5-4と同様で、完形品。5-6も祭祀土器である。底部には径6cmの円形孔を焼成後に穿っている。口縁端面は垂直に近く下位に1条の沈線を施す。頸部にはカキ目が残るものの無文である。焼成は甘く、灰黄白色を呈する。



第8図 第5号墳出土土器II (1/6)

II) 第6号墳

墳丘 (第4図、図版3)

現状では径16mの円形を呈し、土層の観察は以下のものであった (第9図)。

北畔では盛土は石室中心から約5.3mの地点から開始され、最大高は1.7mとなる。大部分は旧表上である灰黒色土層上に盛られ、殊に石室に近い部分では下位に灰黒色土、上に赤褐色土を載せたレンズ状のブロックが目立つ。盛土の外側、網を被せた部分は黒色土が堆積しており、墳裾を示す。その下位の土層は二次堆積によるものであろう。南畔では盛土の始点は5.25mの距離にあり、4mの地点に祭祀土器C群の一端が地山土で検出された。土器検出地点は表土から約0.2m前後と浅かったために不明瞭な点もあるが、両者間で盛土法が異なり、先の報告で記述されたように墳丘構築後に祭祀を行い、さらに土器群を埋めたと考えられる。盛土の始点から約1.8m南から幅1.5m、深さ0.3mの周溝が半周する。以上から、盛土の南北径約10.5m、周溝を含めると13.75mとなる。なお、盛土は北に厚く、南畔では最高1mほどにすぎない。

東畔は石室中心から5.5mの地点で盛土が始まり、北畔と同じく墳裾に黒色土が堆積する。この堆積は盛土の構築法と関わるものであろう。つまり、本墳は葺石などの盛土保護施設を採用していないことから、封上の流失を防ぐために墳裾をより強固に叩きしめた結果、永く原形を保ち黒色土の堆積となったと考えられるのである。南畔および西畔にみられないのは盛土の厚さによる構築法の差と思われる。西畔は運悪く墓道を断ち切ったために土層は単純である。盛土は5mの地点から始まるが、地山整形による平坦面は5.75mの地点に及ぶ。

以上のことから本墳は盛土の南北長10.5m、東西長10.5mの円墳となるが、周溝を含めて径13.75mの円形に復原できる。

主体部（第10図、図版3）

主体部は既に崩壊し、埋土除去に際して2個の天井石を検出した。うち1つは長さ1.3m、幅0.6mの滑石である。

掘形は地山に穿たれるものの第9図にみるように極めて浅く、特に左側壁および奥壁は腰石下端を埋め込むのみにすぎない。したがって掘形のプランはトレンチ部分でしか確認していないが、南北2.9m、東西約3.5mの歪んだ長方形と推測できる。

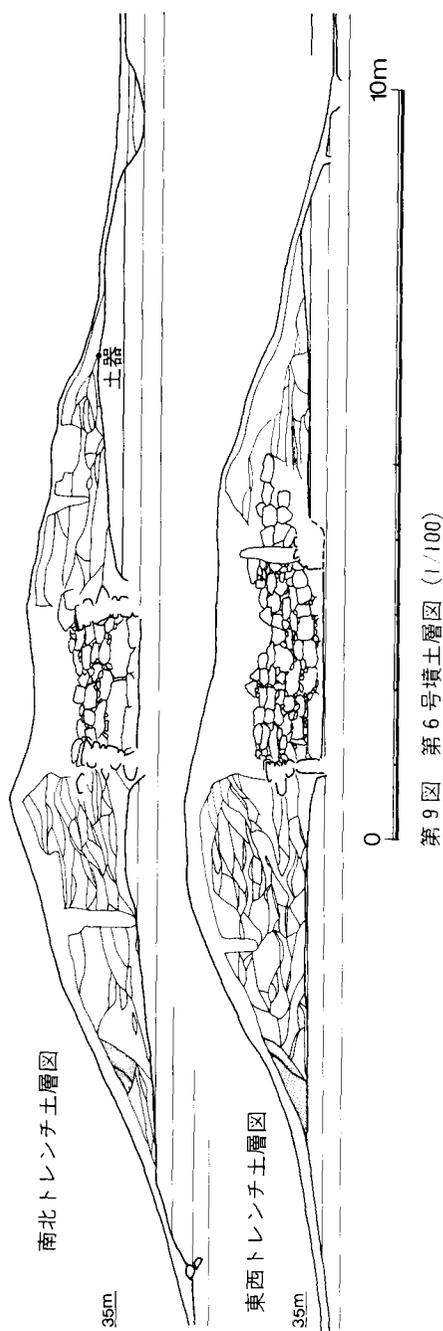
石室は単室の横穴式石室で、いわゆる羽子板形のプランをもつ。奥壁幅1.8m、玄門部内側の幅約1.5m、長さ約2.6mである。

奥壁に平行して幅50cmほどの屍床を設けるが、構成する4枚の板材は右端を除いて倒れかけており、埋め込んだ痕跡はない。

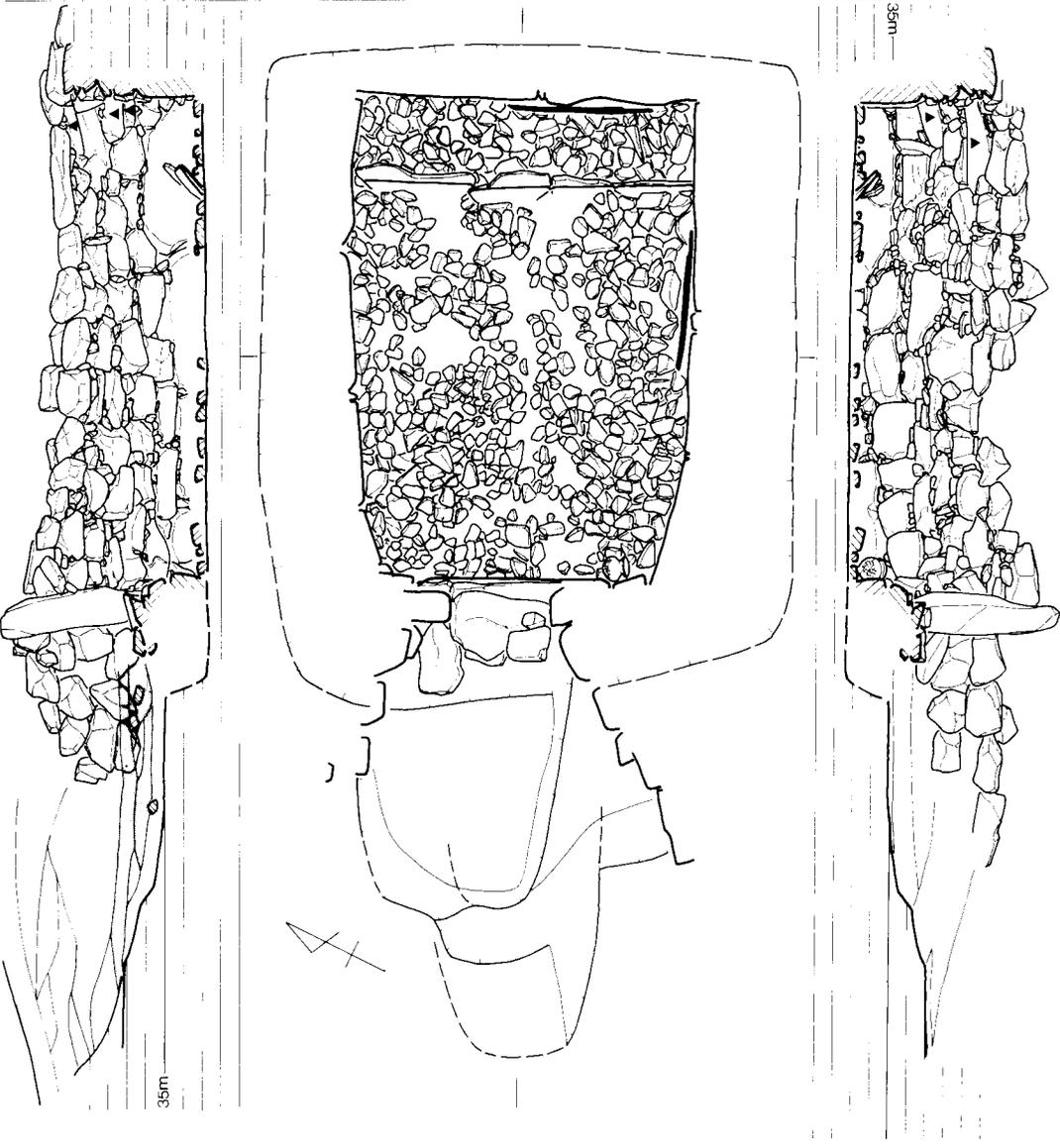
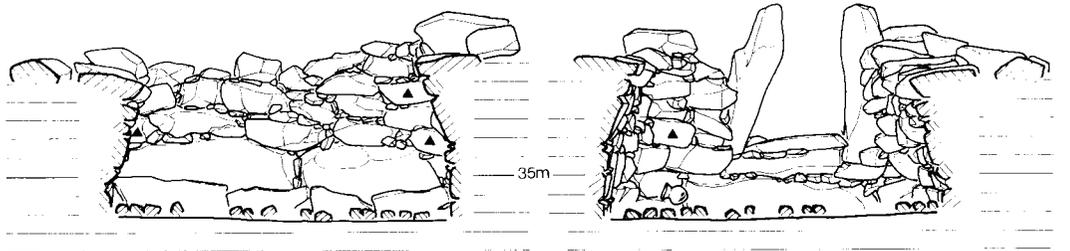
腰石は奥壁を除いて概して小振りで、壁体の構築にも小石を数多く充填しており苦心のあとが窺える。また、隅角ではほぼ一段目ごとに2辺に石材をかけ渡している（第10図の▲印）。

玄門部には大きな石材を据え、基底部の痕跡のみ遺存していれば竪穴式石室と見誤る形態を採る。袖石は2段積み上げた框石上に据えるために不安定なものとなり、事実右側袖石は倒れかかっていた。袖石基部の幅は50cmである。袖石の前面左右には簡略な貼石を用いて墓道の埋没を防いでいるが、これも古墳盛土中にあり脆弱な構造物である。

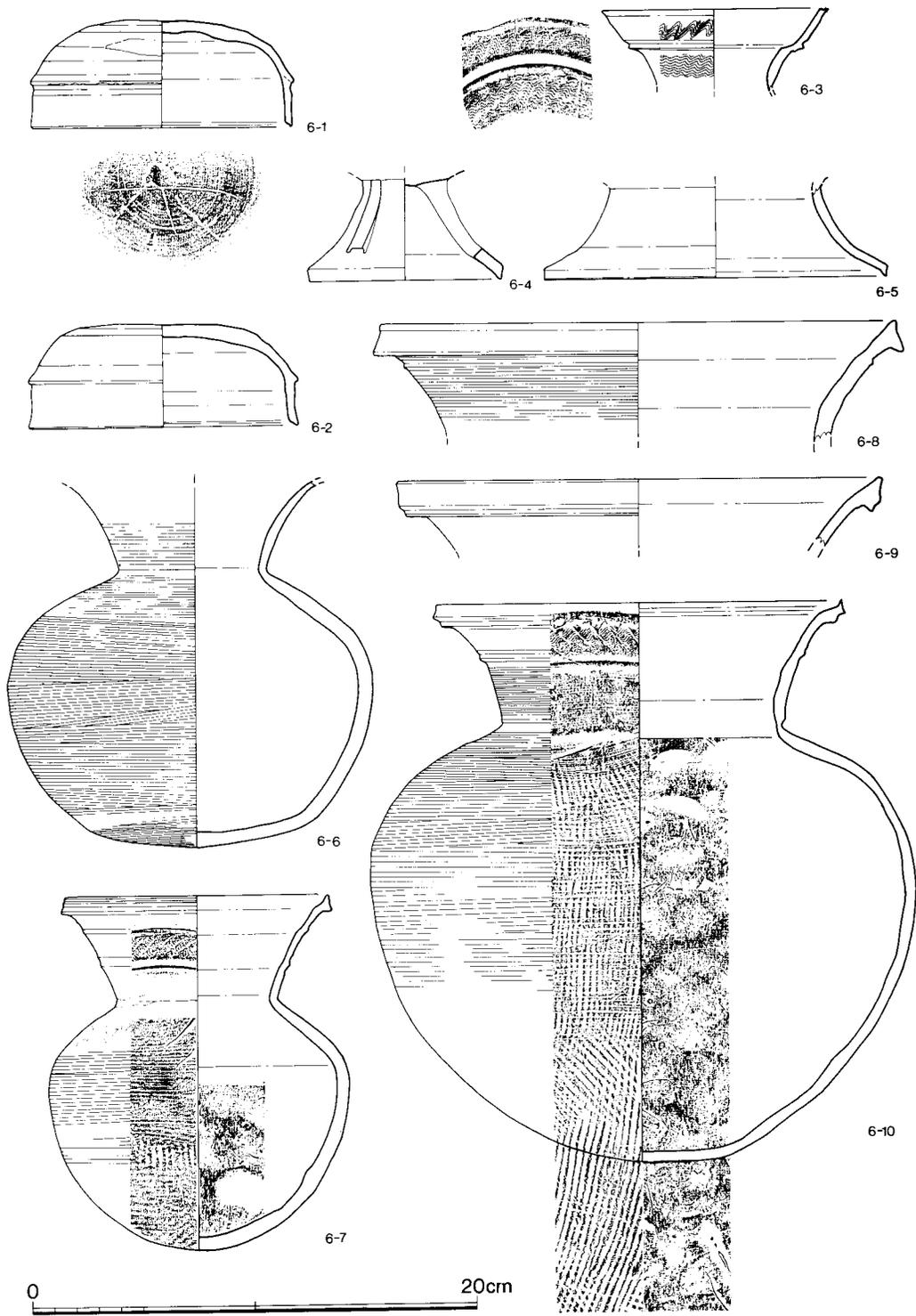
墓道は約2.1m延びる。これは盛土中に掘削されているために検出は困難を極めた。上層の観察では、2枚の踏み締められた面があり、当初の床面を含めて3度の埋葬が考えられる。このうち、最上層の追葬面は



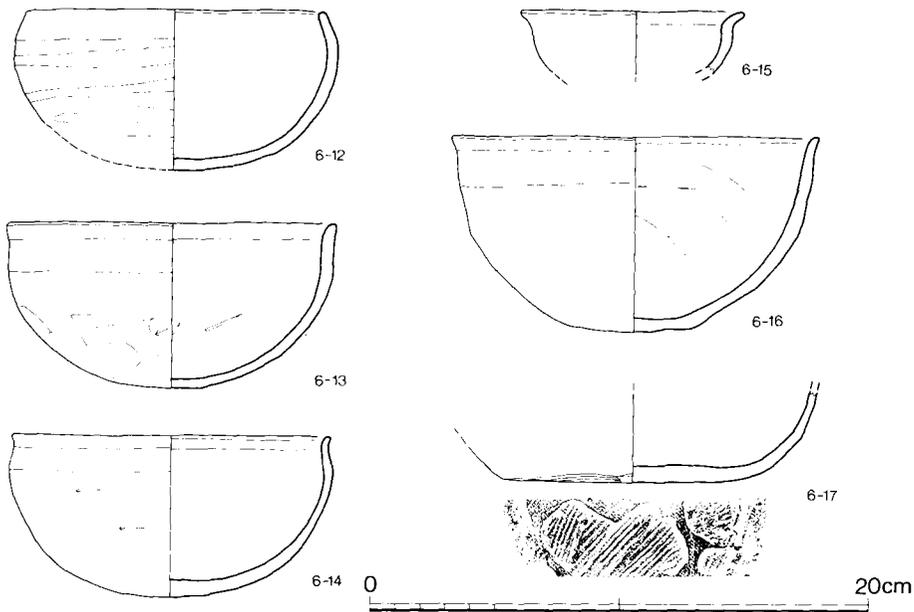
第9図 第6号墳土層図（1/100）



第10图 第6号墳主体部実測図 (1/40)



第11图 第6号填出土土器 I (1/3)



第12図 第6号墳出土土器Ⅱ (1/3)

多量の滑石の小片が混在しており注意される。なお、初葬時の床面は椎石前面約1mにわたって旧地表の灰黒色土層が現れている。

遺物 (第11～13・16・17図、図版8・9)

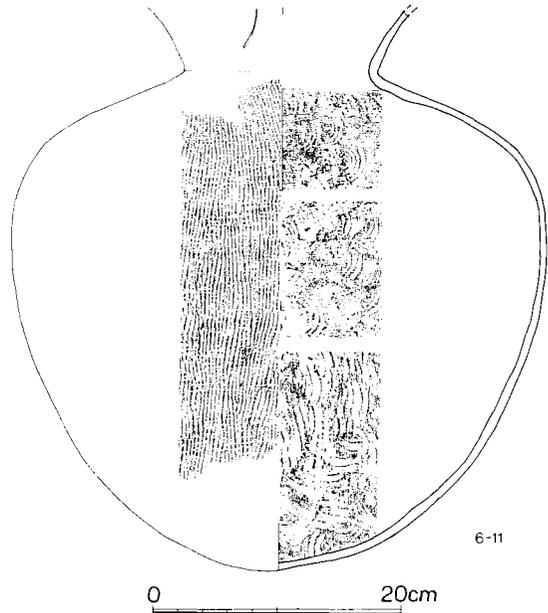
遺物は石室内から大刀2口を含む鉄器類および完存する須恵器壺(6-7)を、墳丘から多数の土器類とともに滑石製紡錘車1を検出した。各々の出土状態を以下に記す。

石室内の太刀は奥壁に沿って切先を北に向けた1口(6-T6)と右側壁に沿って切先を西にむけた1口(6-T7)である。それぞれに小型の鉄器が伴っていたが、取り上げ後不注意によって混乱してしまった。また、鉄釘は埋土除去の際に出土し、原位置は確認できない。また、石室中央付近および屍床内で人骨細片も出土している。須恵器壺は玄室右手前の隅に傾いていた。

墳丘出土の遺物は大きくA～Cの各群に分れる。うち、A群は須恵器杯蓋2点(6-1・2)、同脚片(6-5)、壺(6-9)、大甕(6-11)、土師器(6-17)からなり、大甕は破碎され約1/2を失っている。杯蓋は転倒しており、他の2点は付近で出土したものである。B群は土師器のみからなり、6-12の上に6-14を重ね、中に小石を1つ入れていた。6-13、6-15も隣接して出土した。C群は最も大きな群である。東西約2m、南北約1mの範囲で带状に連なり、所々に大小の礫が混在する。6-10の壺は完形に復原しえたが、出土時は礫が破片の上に乗っており、意識的に割られた状況を示していた。また、この群の中程で2つに割られた滑石製紡錘車

(6-S1)が出土している。

鉄器 第16図6-T1は反りをもつ柳葉式鏃で鋤は不明。6-T2は細身で鉄身は片丸造となる。6-T3・T4は釘で断面は方形に近く、6-T4は身に直交する木質が残る。6-T5は蕨手刀子であろう。カーブするあたりから身の断面は方形に近くなる。6-T6は奥壁下から出土したもので全長78.5cm、刃部長63cmある。把部分は厚さ5mmほどの長方形断面をもち、目釘穴は2個ある。中程に木質が残る。6-T7は全長77cm、刃部長60cmの太刀で右側壁から出土。把頭部分にも段を有する。



第13図 第6号墳出土土器Ⅲ (1/6)

石製品 第16図6-S1は墳丘祭祀土器C群中から割れて出土した。径4.4cm、厚さ1.1cmで断面は梯形となり、側縁も面取りしている。穿孔は鉄器を用いたようで直角に行う。重さは39g。

土器 6-1は約1/3の残片。天井部・口縁部の境に甘い沈線を施す。焼成は生焼に近い。6-2は完形に近い。天井部・口縁部間の段は比較的シャープで、口縁端部内面は匙面となる。調整はやや粗く、天井部外面に篋記号を刻む。いずれもA群出土。6-3は口縁部のみで胴部はない。細部の造作は極めて丁寧かつシャープで整美なものである。C群出土。6-4はⅡ区墳丘上から出土した3方透孔の脚片で約1/2残る。6-5はA群出土で歪みが大きい。どのような器形になるか不明であるが脚部と考えられる。全面にわたって丁寧な横撫でで仕上げる。6-6はM区墳丘出土の異形壺で胴部は完形に近い。底部は平底に近く全面を粗いカキ目で仕上げる。6-7は石室出土の完形の壺。口径12.2cm、器高15.95cmで胴部に比して口縁部が発達している。底部は押し出して成形。口縁端部に2条の凹線を巡らし、頸部は2条の小さな突帯で文様帯を画して櫛描波状文を施す。6-8は6号墳および7号墳の双方から破片が出土している。頸部のカキ目調整が著しく、焼成不良。6-9はA群出土。6-11の大型甕の口縁部と思われるもの中途を欠いて接合しえない。6-10はC群出土の壺で細部は非常にシャープである。胴部は叩きの後粗くカキ目を施す。6-11は器高50cm程に復原されるものの胴部の半分を欠く。焼成は甘く、灰赤褐色に発色する。

第12図は土師器。6-12~15はB群、6-16はC群、6-17はA群から出土した。6-12は口

縁部が内彎したままで終る。外面は篋削りの後丁寧な横撫でし、内面も丁寧な横撫で。鮮やかな赤褐色を呈する。6-13は黒色に仕上げた碗で口縁端が小さく外反する。器表全面に炭素を吸着させて黒く仕上げ、内面は丁寧な篋磨き、外面は篋削りの後粗雑な篋磨きを行う。整形はやや稚拙。6-14も13と同様で、器壁がやや薄い。黒く仕上げていたようだが、現状は大部分が灰赤褐色となる。6-15は小型の碗であろう。口縁部の反りが強いものの、他は13・14と似る。6-16は鉢形に近い形状を示すが、一応碗としておく。口縁端部は小さく外反し、底部は平底風となる。器表が荒れているが内面調整に篋削りを用いているようである。6-17の上師器は底部外面篋削りの後粗い刷毛目で仕上げる。内底面は横撫でで仕上げ、立上り部分には刷毛目が残っている。壺形の器形となろうか。

Ⅲ) 第7号墳

第5・第6号墳の墳丘土は整然と植林されていたが、第7号墳土は広葉樹や雑木が繁り巨大な根幹が縦横にのびて発掘作業は困難を極めた。墳頂は既に陥没し、石材が覗いていたことから、頂部を長方形に掘り下げる方法を採用したが、石室外にまで発掘が及んだために掘形の検出を誤ってしまった。

墳丘 (第4図、図版6)

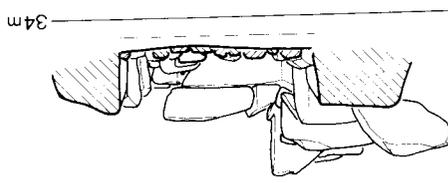
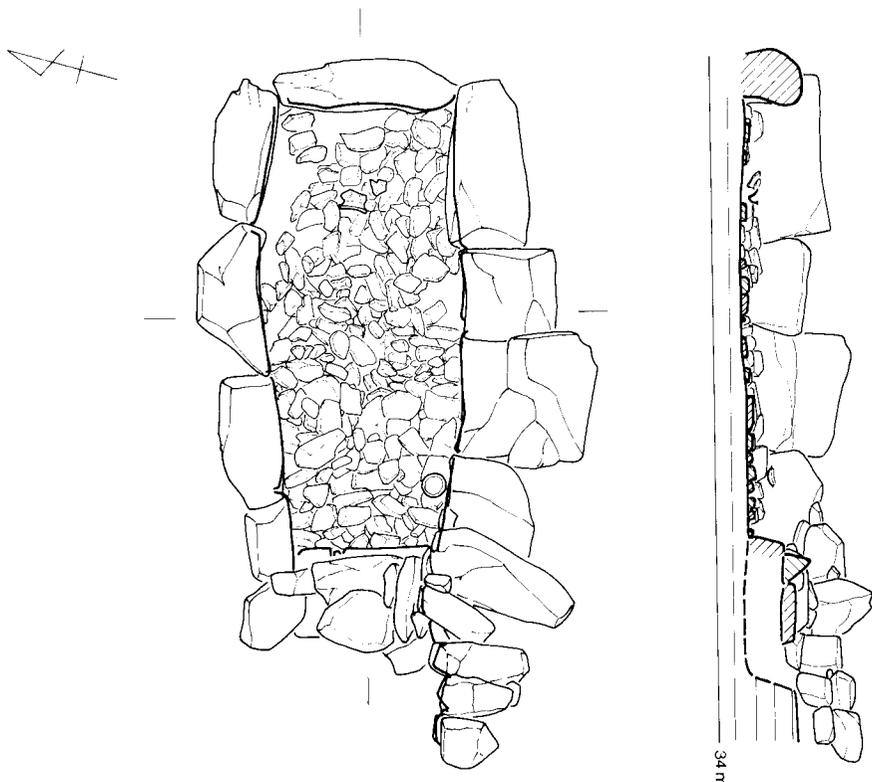
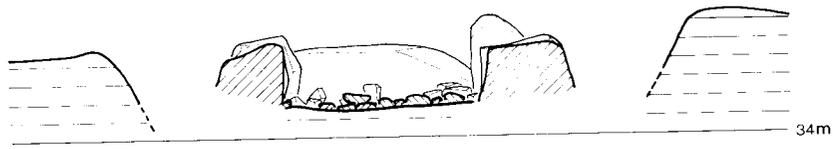
現状でのみかけの大きさは径14m前後の円墳である。北畔では盛土は主体部中心から約3.9mの地点で始まり、その部分は田表土の灰黒色土層が遺存する。以北は約20cmの高さで地山削り出しの段を残して徐々に低くなる。主体部の掘形上端は同1.5mの地点に位置する。南畔の盛土開始は主体部中心から約3.6mの地点である。同5.1mの地点から幅2.5mにわたる2段の浅い溝が掘削されるが、この主体部側の土端は弧状にカーブするものの外側ラインは直線に近い。このことから内側の周溝を切って後世に溝を開削したと考えられる。以上により、盛土の南北径は7.3m、周溝までの内径は8.9mとなる。奥壁側の東畔は最高0.65mの盛土が主体部中心から約5.3mの地点で始まる。同5~9mの地点から幅0.7m、深さ0.1mの浅い溝状の落込みを確認したが、平面的には把握できなかった。南畔の観察とを合せ、主体部中心から内側上端径5.1~5.9mの周溝が巡っていたと推定され、盛土部分を合せた径9m前後の円墳とできる。

主体部 (第14図、図版6)

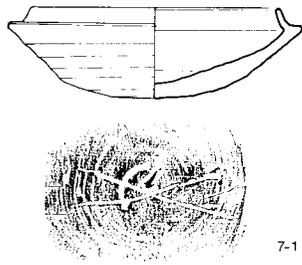
奥壁幅1.0m、玄門部内側の幅0.8m、長さ約2.3mのやや胴の膨らむ長方形プランをもつ。腰石は第6号墳に比して大きく、以上はすべて抜き取られている。横口部の構成は第6号墳と共通し、袖石は第1段の框石上に置くが、滑石を用い上半は折損している。墓道は確認できなかったが、第5号墳のような形態を想像できよう。

遺物 (第15図、図版9・10)

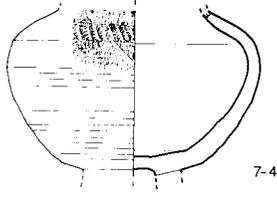
石室内から鉄鏃、刀等の残片、須恵器壺(第15図7-6)、杯身(同7-1)を、墳丘1区から



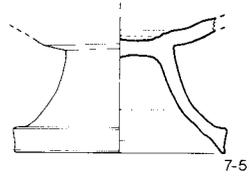
第14図 第7号墳主体部実測図 (1/40)



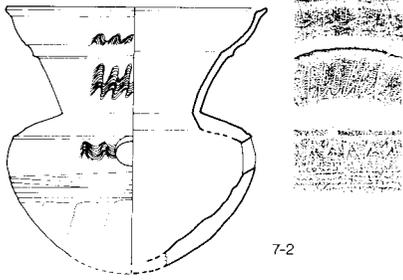
7-1



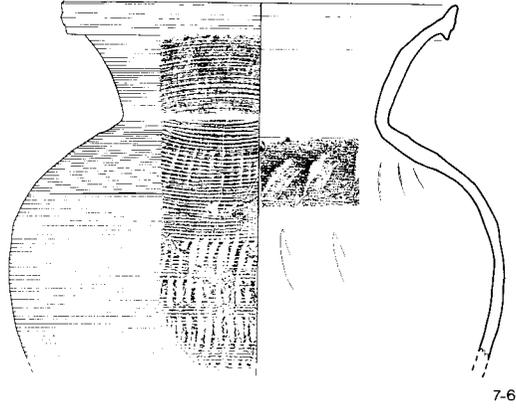
7-4



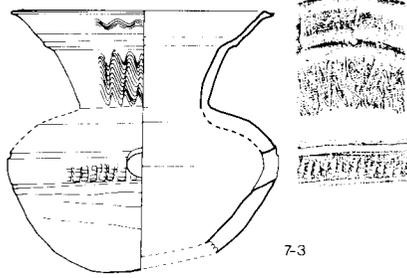
7-5



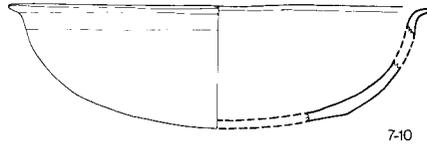
7-2



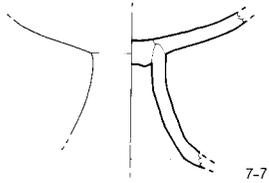
7-6



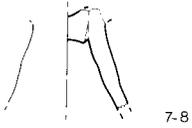
7-3



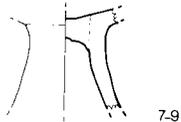
7-10



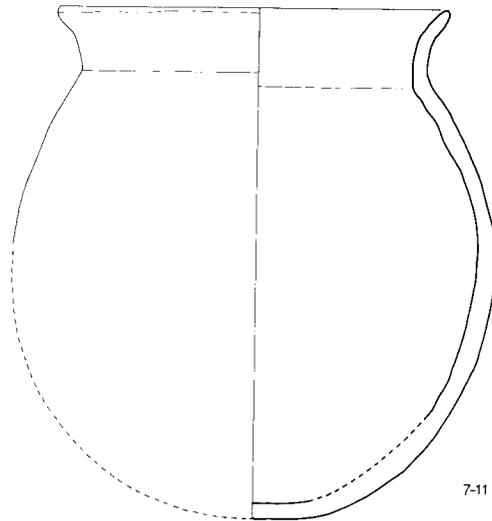
7-7



7-8



7-9



7-11



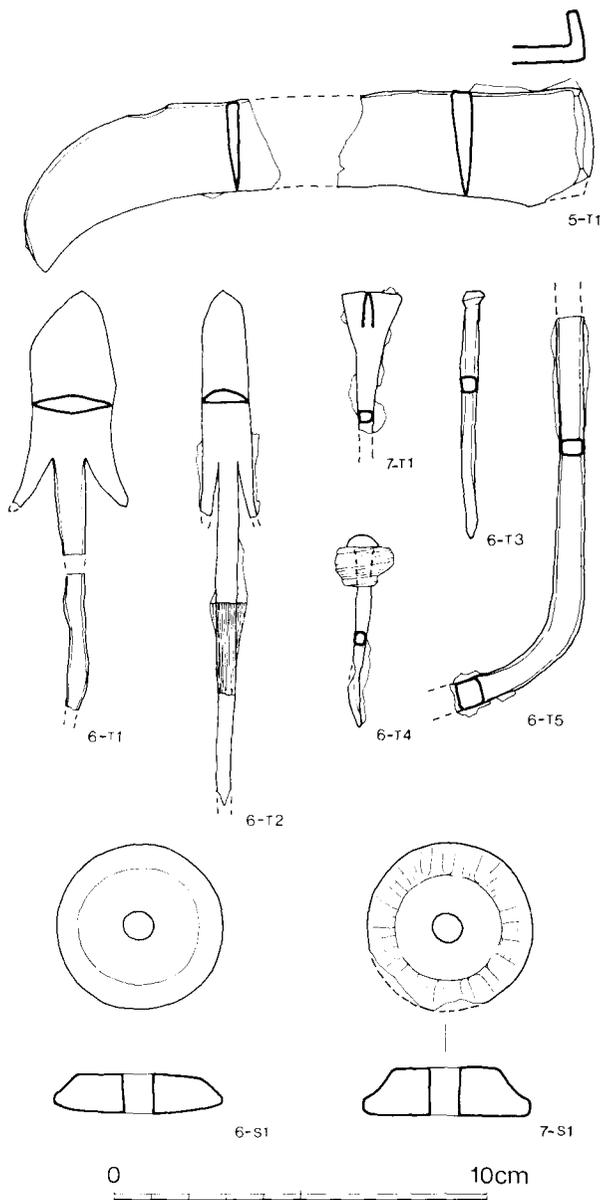
第15图 第7号填出土土器 (1/3)

多くの土器群を出土した。第16図
7-S1の滑石製紡錘車は玄門付
近で遊離していた。

鉄器 7-T1は鉄鎌片。刃
部の幅1.6cmである。

石製品 7-S1は6号墳出
土品に比して厚く、側面が匙面状
になる。重量41g。

土器 7-1は石室右前半
で、床面より約10cm浮いた状態
で出土した完形品。追葬あるいは石
室の再利用に伴うものであろう。
底部外面に篋記号を刻む。7-2は
完形に近い。口縁部に一部焼け
歪みがあるが整美な形を呈する。
口縁端部を外上方へ鋭くつまみ出
し、内傾する匙面を造り出し、や
や膨らみをもって口頸部の段へと
続く。これもシャープ。胴部文様
帯の上段には明瞭な段をおき、波
状文を施文する。文様帯の下位に
は一単位のカキ目を粗く残すもの
の、底部は静止篋削りで削った後
に撫でて仕上げた。7-3の匙は
前者に比して口頸部の広がりが大
きく、胴部最大径も下位へ移行し
安定感がある。口縁端部が水平よ
りやや下方に引き出されるために
匙面は外傾する。口縁部は2より



第16図 鉄器・石製品実測図(1/2)

率が小さくなっている。胴部は偏球形に近く文様帯に櫛描刺突文を置くが、上下を画する界線は小さく波打ち、回転を利用しない手描きである。文様帯以下は丁寧に静止篋削りを行い、部分的に撫でている。また、底部には穿孔を焼成後行う。7-4は脚付壺であろう。透孔は4個所に

あったと思われる。胴部最大径部分に櫛描刺突文を施す。7-5は高杯あるいは底部の横撫で調整が粗いことから脚付壺かと思われる。約 $\frac{1}{2}$ の残片であるが透孔はない。脚端部の造作は鋭く、踏んばる。7-6は石室内の敷石上で検出、口縁部はほぼ垂直に肥厚し、外面に2条の凹線を刻む。口縁部は叩き出して成形し、胴部にも極めて彫りの鋭い叩きを施した後にカキ目調整する。7-7~9は土師器高杯片。いずれも杯部・脚部を接合したあとに粘土を充填して成形する。7-10は土師器皿と呼んでおく。口縁部は鋭く折れ曲る。調整等は不明である。7-11は土師器甕。胴部は間延びした円形となり、口縁部はくの字状に外反する。内面は篋削りで、外面は刷毛目で仕上げるようだが摩滅が甚しい。

IV) 第8号墳

前述したように重機を使用して試掘溝を掘削した際に検出。

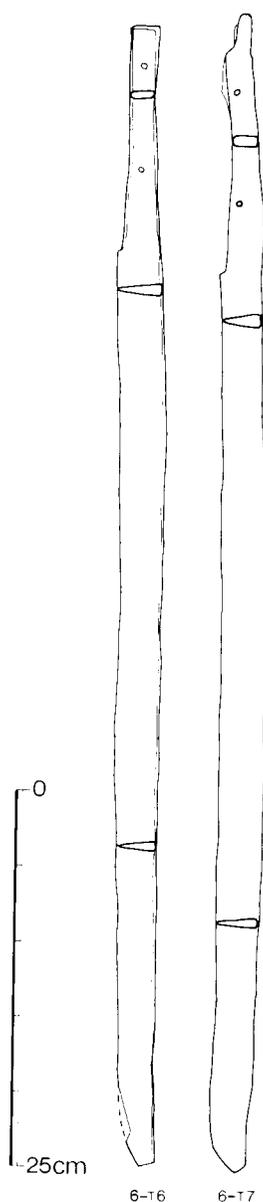
墳 丘

調査前の観察では盛土の存在に気付かなかったが石室を発見したために北側へトレンチを入れた。そこでは表土から地山まで約20cm程の堆積層があるものの、積極的に盛土といえる土層はなかった。しかし、石室中心から約4.6mの地点で幅約1m、深さ約0.15mの浅い黒色土層の落込みを検出した。これは周溝の一部であり、したがって、径約9mの円墳となろう。

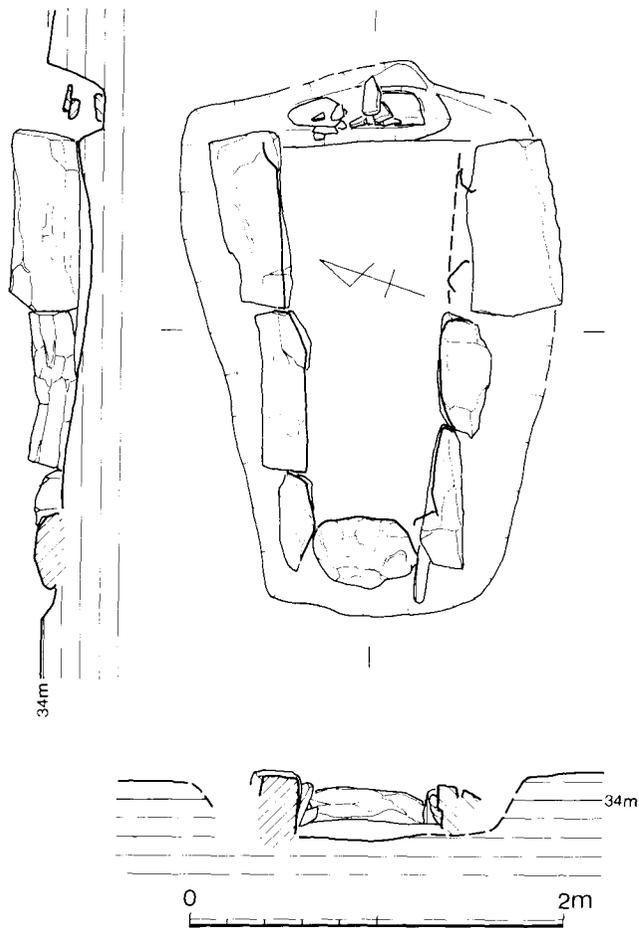
主体部 (第18図、図版7)

奥壁の腰石は抜き取られており、右側壁最奥部の石材も動いている。石室の平面プランは奥壁幅約1m、框石部幅約0.6m、長さ2mの羽子板形である。

遺物は出土していない。



第17図 第6号墳出土木刀
(1/5)



第18図 第8号墳主体部実測図 (1/40)

V) 旧石器時代の遺物

(i) 乙植木古墳群出土の石器 (第19図)

台形様石器 (1) 黒曜石の不定形剥片を素材とする。左右側辺部の刃潰し加工は、c面ではバルブ除去作業の過程でb面からの加撃により形成され、さらに基部 (b面)で左側辺部まで行われている。a面ではd面からの加撃による。全長 $2.4\text{cm} + \alpha$ 。刃部幅 1.9cm を測る。

細石核調整剥片 (2) 黒曜石を素材とする。b面右側からc面左側の間に4条の細石刃剥離痕が認められる。打面は正面及び後部側面からの加撃で作出する。側面調整は、b面では後方下位からの一撃で作出、c面では上下左右各方向からの調整が行われている。各面の調整技術か

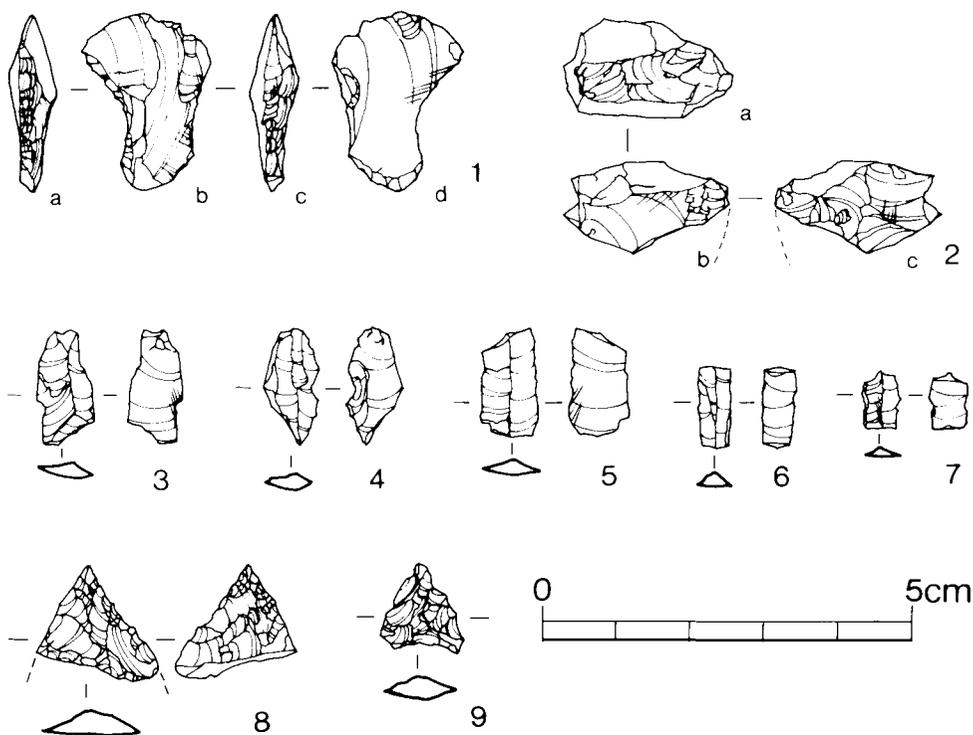
ら半舟底形細石核の打面部剥片と考えられる。

細石刃 (3～7) 3はほぼ全体を残している。4は左側辺部を一部折断されている。5～7は頭部、先端部を折断した中間部、5は上部折断の際一坦左側辺にノッチ状の抉りを入れ折断している。各々の計測値は次のとおりである。

- 3. 全長1.55cm、幅0.7cm、厚0.2cm
- 4. 全長1.6cm、+α幅0.7cm、厚0.25cm
- 5. 全長1.45cm、幅0.75cm、厚0.25cm
- 6. 全長1.1cm、幅0.45cm、厚0.2cm
- 7. 全長0.75cm、幅0.5cm、厚0.15cm

石 鏃 (8、9) いずれも黒曜石を素材とする。8は扁平な剥片を用いた大型の鏃であるが、先端部付近で折れ後に折断面を側面として再調整を施している。9は小石鏃と称するもので、調整は雑でほぼ正三角形を呈し、基部に浅い抉りが入る。全長1.2cm、幅1.2cm、厚0.3cmを測る。

以上9点の石器が採集されている。この内1～7は、旧石器時代に属するものである。



第19図 乙植木古墳群出土石器 (実大)

(iii) 乙植木丘陵の旧石器資料について

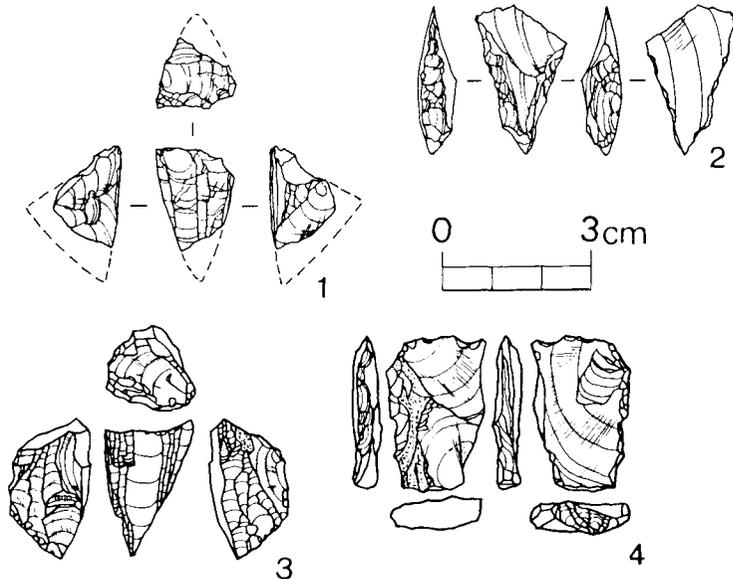
本遺跡で確認された資料は、先に紹介したとおりで、遺物の少なくないことと、調査の段階で層位の確認ができなかったことは惜しまれるが、個々の資料は、今後この地域の旧石器資料の出土状態について問題となりうるものであるために、個々の特徴をまとめておく。

台形様石器 不定形の横剥ぎ剥片を用い、バルブ側及び先端部に対潰し加工を加える。この種の加工技術で製作された台形様石器は、長崎県北松浦郡田平町日ノ岳遺跡Ⅲ層で確認された所謂日ノ岳型台形様石器(註1)に属するものである。この日ノ岳遺跡においては、Ⅲ層では他にナイフ形石器、台形石器と共伴し、Ⅱ層では、枝去木型台形様石器とナイフ形石器とが出土し、Ⅰ層の層位からも細石核は検出されていない。

乙植木周辺の遺跡でこの形態の台形様石器は、宇美町浦尻池遺跡(註2)、粕屋町原遺跡(註3)福岡市東区蒲田遺跡(註4)第19図4などがある(第20図、表1参照)

半舟底形細石核・細石刃 北部九州に広く分布しており、粕屋平野においても別表1に示すとおり8遺跡で確認されているが、この地域では、先に紹介した台形様石器と共に採集された例として第20図1・2の浦尻池遺跡や原遺跡があり、調査資料として蒲田遺跡がある。蒲田遺跡E区Ⅱ一下層では、第20図3・4の他にナイフ形石器、台形石器等が検出されている。このことから直ちに結論は導き出せないが、他の地域の出土例と若干異なる。

以上の様に当地域の旧石器文化そのものが、まだ混沌とした状態であり、今後資料の増加とともに現在までに確認されている資料の整理を進めることによって解明していかなければならないものと思う。



第20図 参考資料 1・2:浦尻池遺跡、3・4:蒲田遺跡(2/3)

註1 下川達弥、久村貞男 「日ノ岳遺跡」(『日本の旧石器文化』 雄山閣 1976)

註2 宇美町教育委員会 『神領古墳群』 1984

註3 日高正幸氏所有の資料 宇美町立歴史民俗資料館に展示

註4 福岡市教育委員会 『蒲田遺跡』 1975

第1表 粕屋平野の旧石器時代遺跡

遺跡名	所在地	遺物	備考
1 蒲田(部木)	福岡市東区蒲田	ナイフ形石器、台形様石器、台形石器、細石核、細石刃 他	福岡市文報 第33集 考古学ジャーナル70
2 和 白	" 東区和白	尖頭器	
3 雁ノ巣砂丘	" 東区和白	ナイフ形石器、台形石器	宇美町立歴史資料館展示 (日高氏所有)
4 戸 原	粕屋郡粕屋町戸原	ナイフ形石器、台形様石器、台形石器、細石核 細石刃、尖頭器	宇美町立歴史資料館展示 (日高氏所有)
5 内 橋	" " 内橋	台形様石器、細石核	
6 西 尾 山	" " 内橋	細石刃	九州縦貫道文報
7 駕 輿 丁 池	" " 内橋	ナイフ形石器、台形様石器、細石刃	九州考古学5・6
8 平原サイケ尻	" 須忠町	ナイフ形石器	
9 乙 植 木	" " 乙植木	台形様石器、細石核、細石刃	
10 浦 尻 池	" 宇美町浦尻	台形様石器、細石核	宇美町立歴史民俗資料館 展示
11 山 ノ 内	" " 山ノ内	細石核	

石器は表採品とあわせて古墳盛土中からかなりの点数が出土したが、多くは剝片であった。調査期間と費用および調査の手順から、最も良好な状態にある古墳下層の調査を行えなかったのは飛野の責任であり、今後に期すとともに多忙をさいて執筆して頂いた平ノ内氏に謝意を表する。

5. お わ り に

(i) 第2次調査のまとめ

第5号墳 盛土径約7m、周溝内までを含めると径約10mの円墳と推定できる。主体部は0.7×2.1mの内法をもつ竪穴系横穴式石室であろう。石室からは鉄鎌他、墳丘から一括して須恵器が出土している。このうち、杯身は大阪府陶邑古窯跡群編年のTK208型式に相当しようが、杯蓋はやや丈高の感がある。甕も時期的にはやや新しい様相を見せることからTK208型式の新しい段階、ないしTK23型式の古い段階におくことができよう。第7図5-1はそれらよりさらに後出する様相をみせるが、出土地点が異なっているために保留しておく。

第6号墳 盛土径10.5m、周溝内側径約14mの円墳である。主体部は古式の横穴式石室であ

る。天井石の長軸が約1.3mと先述したが、現状の壁体を構築時のものとし、天井石架構には幅1mほどにせり出していなければならないと仮定するならば、石室高約1.6m程となり、これは袖石を約50cm上回るとのこと、石室の平面プランから推されることである。注目すべきは框石の基礎に据えられた巨石、屍床と浅い墓道である。この石室が仮に腰石上のすべてを失っていたならば幅広ながら竪穴式石室を推定せざるを得ないような形状である。屍床を有する古墳は近年その数を増したとはいえ、分布からみれば偏在しており粕屋郡では初出の例であろう。

遺物は石室から鉄器片と須恵器壺、墳丘から土器及び紡錘車が出土した。墳丘A群は須恵器甕・同杯蓋を、B群は土師器碗、そしてC群は須恵器壺・同甕や土師器の細片からなっていた。このうち、杯蓋は第5号墳出土例に比べて天井がやや扁平で古相を示すといえ、壺の口縁形態においても大きく弧を描くように外反する様相はTK208型式に相当するものと考えられる。

第7号墳 盛土径約7m余、周溝内側までの径約9mの円墳に復原されよう。石室はそのプランから竪穴系横口式石室に属する。遺物は石室内から鉄器片、須恵器壺・杯、墳丘から土師器を出土した。このうち、石室内から出土した杯身は追葬に伴うもので6世紀末葉に比定できる。他は第5号墳と同じく、TK208～TK23型式頃に相当するであろうが、甕の口縁形態は胴部のそれに比して古相を示す。

第8号墳 墳丘は周溝で反転して径約9mの円墳となる。主体部は腰石を残すのみであるが、恐らく竪穴系横口式石室であろう。遺物は皆無である。

(iii) 古墳群の構成

先の報告で調査担当者の石田勲氏は、第1号墳をTK208型式、第2号墳の遺物群には新古の様相が認められるものの大略TK23型式に、そして第3号墳をTK47型式におのおの並行するとして第1号墳から順次西側へと築造されたと考えた。

そして今回の調査では第6号墳が最初に築造され、引き続いて第5号墳、第7号墳が相前後して続くと考えが、第2号墳と第5号墳についてはどうであろうか。杯身は第5号墳出土例では立上り部分の器高に対する比率が1/2.7に対して、第1号墳出土例では約1/3であり、第5号墳から出土した身の方が立上り部分が長く、全体の造作も薄く仕上がることなどから先出すると考えられるが、杯蓋に型式差は見出し難い。また、第7号墳出土の甕と第2号墳出土の甕との比較では第2号墳出土品の方が技巧に走るきらいがうかがえるものの近似する要素が多い。

以上、簡略ながら時期的な問題を記述したが、これらを総合すると以下のようになる。

まず、TK208型式の段階で第1号墳および第6号墳が築かれる。一方は狭長な平面プラン、他方は幅広の羽子板形プランを有するものの、両者はともに袖石を地山に埋め込まず框石上に載せるという稚拙な手法を採用する点で共通する。その後、TK23型式段階までに第2号墳・第5号墳・第6号墳等が築造される。遺物からみれば後2者の方がやや先行したといえる。この場合も羽子板形プランと長方形プランの組合せとなる。さらに第3号墳が後続する。第8号墳について

は築造時を示す遺物はないが、構造や立地から他の古墳と大きな時期差はないであろう。

上記したような石室形態の差異は柳沢一男氏によって、幅広タイプは前方後円墳や大型首長墓に、狭長なタイプは中小の古墳に採用されると指摘されているが、本古墳群は中小規模の古墳間にも採用する石室形態に差異があるという一例を示している。そして各時期で両者が組合さることは優劣の関係を推測させる。即ち、本群は盟主的な第6号墳・第2号墳・第3号墳の3代3古墳を中心として、その近親者の古墳を加えた墓所であると考えられるのである。

第4号墳に関しては先の報告書で示されたように他の古墳との系譜が把めず、除外しておく。

造営集団たちについては以下のように考えられる。第8号墳はやや問題があるものの、他の6基の古墳が尾根線よりやや北側に古置し、地形的に北を意識していることは既に指摘されたとおりで、今回調査した古墳もすべて同様である。このことはとりも直さず造営した集団がこの尾根の北方で生活していたことを示す。本丘陵の北側は狭い谷を挟んで若杉山から派生する標高30m前後の低丘陵が複雑に入り組み、その上には旧石器時代以来の祖先の足跡が知られており、本古墳群の被葬者達もその一端を担っていたであろう。

(iii) 乙植木古墳群の意義

古墳群は3世代にわたると想定しているが、この丘陵に初めて築かれた古墳はいずれも袖石を框石上に載せるという不安定な構造を採用しており、当地における此の種の石室の初現としてふさわしい。この系譜は第6号墳に用いられた屍床が示唆する。いわゆる屍床は肥前・肥後・筑後地方に発達した構造物であるが、その最も簡略化された形態といえる奥壁に平行して1人分の屍床のみを設ける古墳が分散して知られるようになった。武雄市玉島古墳²⁾、有明町竜崎3号墳³⁾、甘木市小田茶臼塚古墳⁴⁾、津屋崎町奴山8号墳⁵⁾、福岡町手光古墳群南支群第2号墳⁶⁾、宗像市須恵クヒノ浦遺跡⁷⁾などである。これらのうち、宗像地域は屍床盛行地域とは遠隔の地であるが、乙植木古墳群第6号墳を介して結び付けられる。この背景にはその死に際して「糟屋の屯倉」が献上されたという筑紫国造磐井の影響が看取できる。磐井の没年は527年とされるが、本古墳の造営時期を考慮すれば筑紫君が勢力範囲を拡大しつつある期間に該当する。

(iv) 今後の課題

今回の調査で初期横穴式石室および竪穴系横口式石室のみを埋葬主体とする小規模な群集墳の1つが明らかとなったものの、まだ数少ないこのような遺跡は特定個人墓から、ある種の一般家族墓へと変容する過渡的な墓制として多くの内容をはらんでいる。この報告では担当者の力量不足も手伝って言い尽せなかった点が多くある。今後へ残された課題としていくつかの点を列記しておく。

墳丘上出土遺物について 第1次調査に続いて今度も墳丘から多くの遺物を出土した。第5号墳はI区から底部穿孔の甕と杯蓋・杯身が、第6号墳はI区から大別してA・B・Cの3群に分れて多くが出土した。A群では破片の積重なった須恵器壺と杯蓋、B群では土師器、C群では土師

・器須恵器の多くに混って大小の礫と石製紡錘車があった。第7号墳ではA・B群に分れていたが整理の段階で混乱してしまった。が、ここでも位置的には第6号墳と共通する現象がみられる。層位的な問題は必ずしも確認できていないが、いずれも盛土の開始するあたりの地山土にあることは解っている。第2号墳で指摘されたように、葬送儀礼終了後に破壊あるいは遺棄して盛土を行ったという解釈を今回も継承しておくが、その明確な層位関係、出土状況とともに、意義については今後の資料の充実を図るとともに検討したい。

須恵器について、古墳群出土の須恵器が陶邑編年のⅠ期あるいはⅠ型式に相当することに異論はないであろう。しかし、そのうちのどの型式、段階に比定するかは意見の分れる部分もあると思われる。殊に蓋杯・甕はそのまま陶邑編年に当てはめることは無理がある。例えば蓋杯に関しては天井部あるいは底部内面の同心円文当具痕がある。この手法は陶邑ではⅡ期のMT15型式になって現われるものであるという。また、杯身立上り内面は段となる例が多いが、第5号墳出土例はいずれも沈線で替えている。蓋の形態も陶邑編年では新しい要素である。

以上を要約すればこれらを焼成した窯が北部九州に存在するのではないかとということである。

従来、北部九州に初現の窯跡は福岡市新貝窯跡や佐賀市神籠池窯跡が陶邑Ⅰ期後半から開始されるといわれているがその詳細は公表されていない。その後、甘木市周辺で陶邑で製作されたものとは明らかに異なる陶質の土器が大量に出土するとともに窯跡も指摘されている⁹⁾。これらは陶邑で須恵器生産が開始されたのと同じ頃あるいは遡ると考えられており、そうすれば新貝窯などとの間に介在する窯跡の存在も考えられよう。

註

- 1) 柳沢一男 「堅穴系横口式石室再考―初期横穴式石室の系譜―」(『森貞次郎博士古希記念古文化論集 上巻』1982)
- 2) 佐賀県教育委員会『玉島古墳』1973
- 3) 佐賀県教育委員会『竜王崎古墳群』1968
- 4) 甘木市教育委員会『小田茶臼塚』(『甘木市文化財調査報告』第4集 1979)
- 5) 福岡県教育委員会『新原・奴山古墳群』(『福岡県文化財調査報告書』第54集) 1977
- 6) 福岡町教育委員会『手光古墳群』(『福岡町文化財調査報告書』第1集 1981)
- 7) 昭和59年、宗像市教育委員会調査。6世紀後半と推定される前方後円墳。
- 8) 小田富士雄「九州の須恵器」(『世界陶磁全集』2 小学館、1979)
- 9) 甘木市教育委員会『古寺墳墓群Ⅰ、古寺墳墓群Ⅱ』(『甘木市文化財調査報告』第14・15集 1982・1983)

圖

版



(1) 全 景 (西上空から)



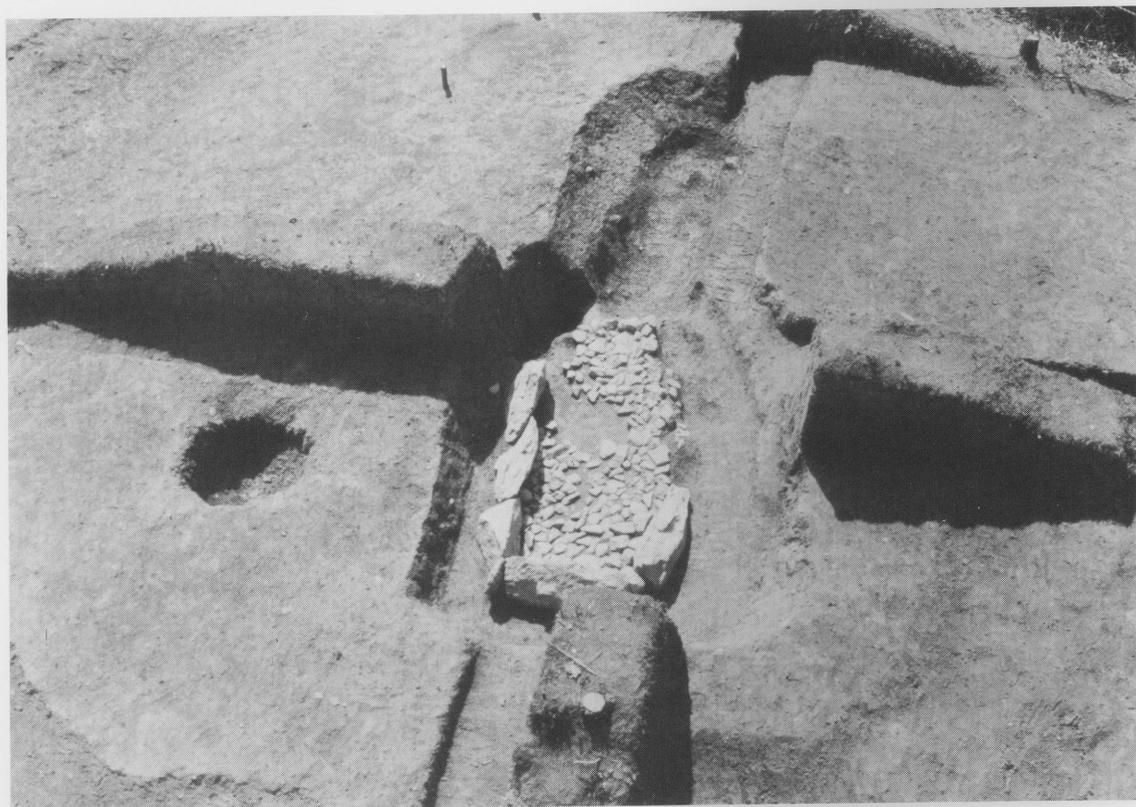
(2) 全 景 (北西上空から)



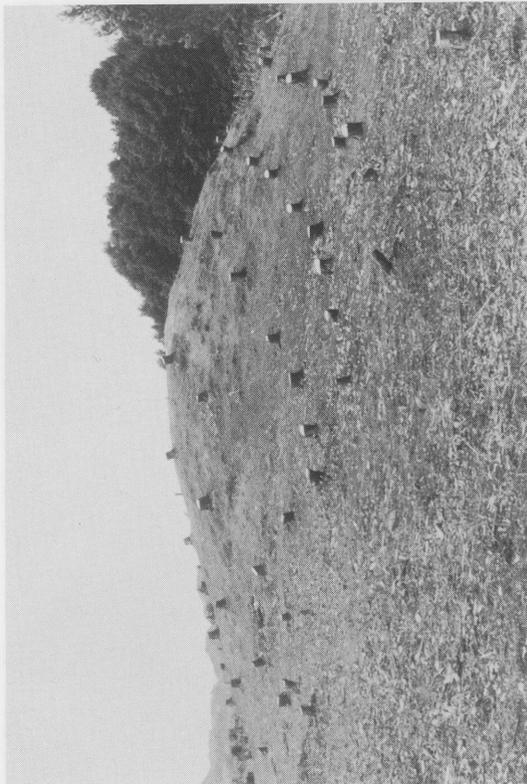
(1) 第5号墳現況 (東から)



(2) 第5号墳遺物出土状態 (南から)



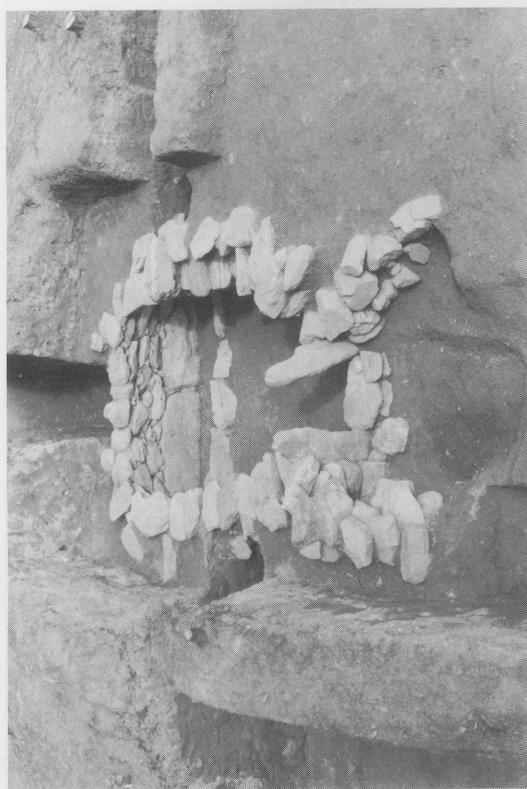
(3) 第5号墳主体部 (東から)



(1) 第6号墳現況 (東から)



(2) 第6号墳主体部と墳丘出土土器 (西から)



(3) 第6号墳主体部 (西から)



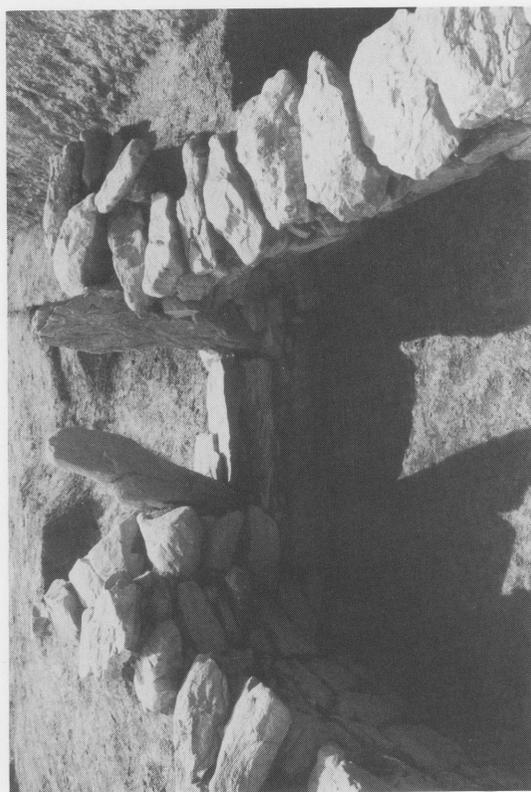
(4) 第6号墳主体部と墳丘出土土器 (南から)



(1) 第6号墳主体部遺物出土状態(北から)



(2) 第6号墳主体部遺物出土状態(北東から)

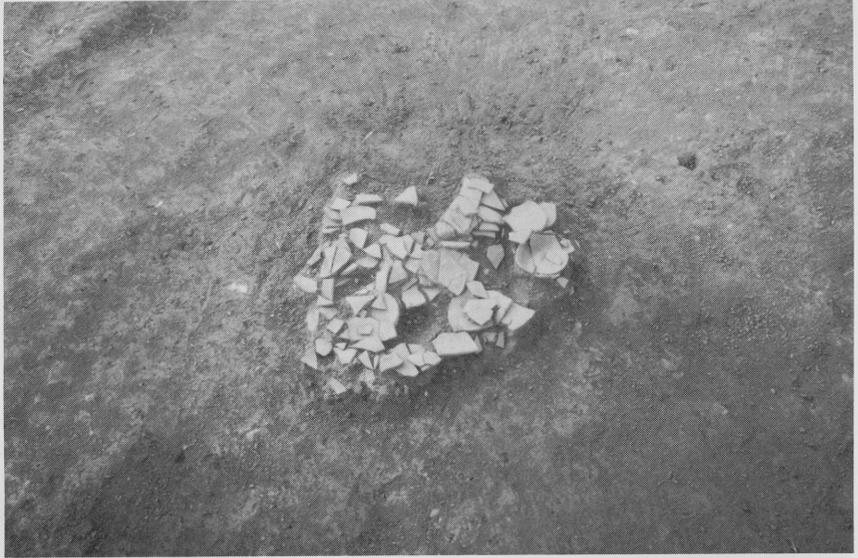


(3) 第6号墳玄門部分(東から)



(4) 第6号墳墓道左側貼石(南から)

(1) 第6号墳墳丘出土土器
A群(南から)



(2) 同 B 群
(南から)

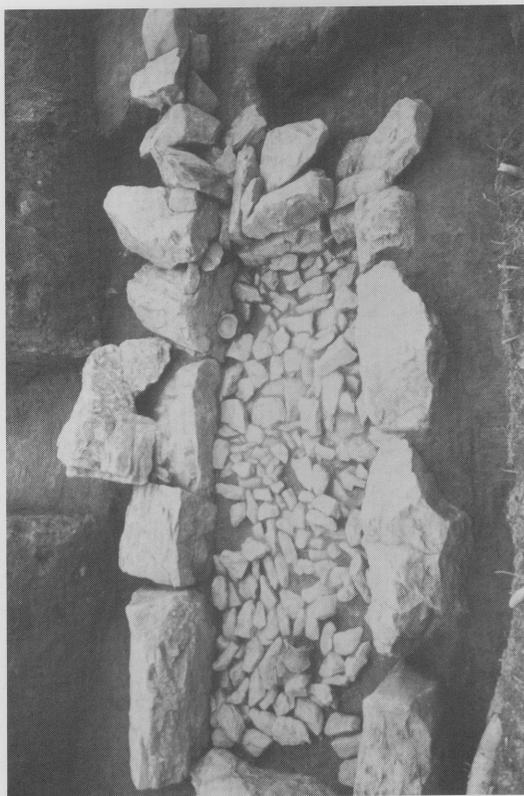


(3) 同 C 群
(南から)

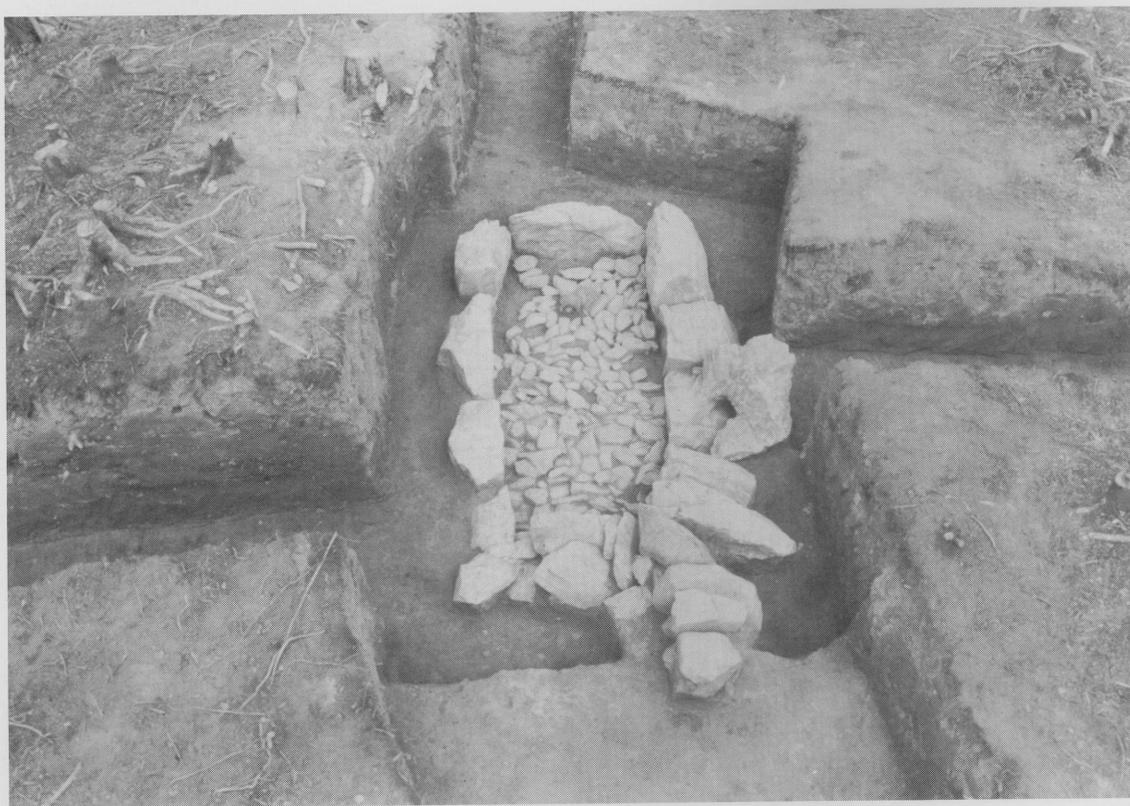




(1) 第7号墳現況 (東から)



(2) 第7号墳主体部 (北から)



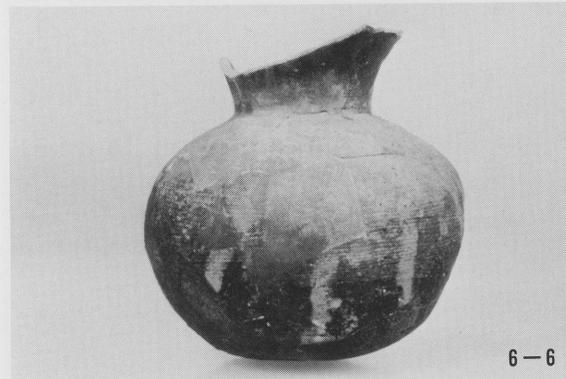
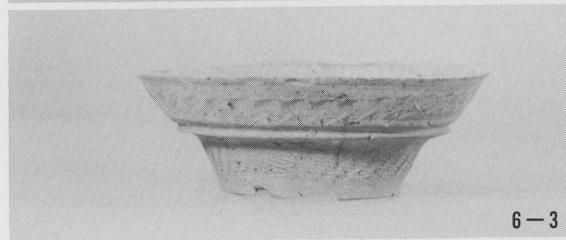
(3) 第7号墳主体部 (西から)

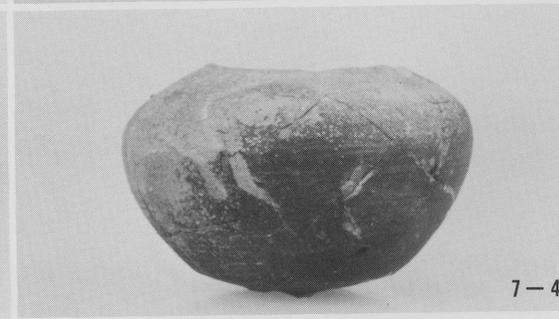
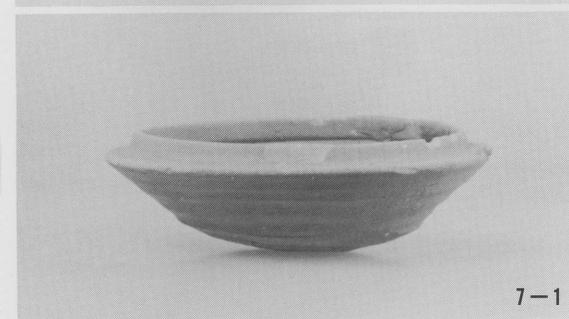


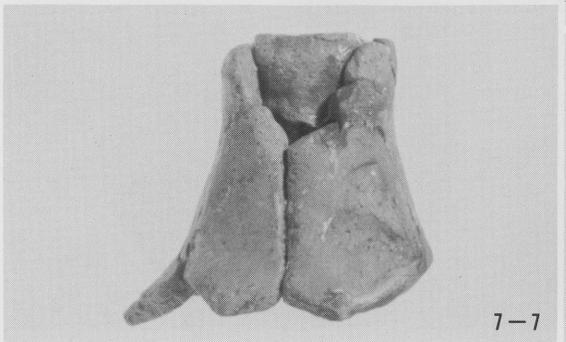
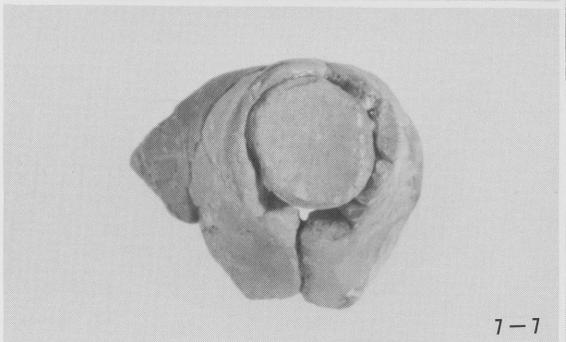
(1) 第8号墳主体部（西から）



(2) 調査終了後全景（東から）







乙植木古墳群 II

須恵町文化財調査報告書
第 2 集

昭和 61 年 3 月 31 日

発行 須 恵 町 教 育 委 員 会
柏屋郡須恵町上須恵 1117

印刷 青 柳 工 業 株 式 会 社
福岡市中央区渡辺通 2 丁目 9 の 31
電話 092 (641) 1431